

氏 名	ささ おか けん た 笹 岡 健 太
学位(専攻分野)	博 士 (地球環境学)
学 位 記 番 号	地 環 博 第 41 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	地 球 環 境 学 舎 地 球 環 境 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	意識の内なる超越 ——フッサールの超越論的現象学を手がかりにして——

論文調査委員	(主 査) 教 授 小 川 侃	准教授 柏 久	准教授 佐 藤 義 之
--------	--------------------	---------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ドイツの哲学者エドムント・フッサール（1859－1938）の超越論的現象学を手がかりにして、それ自体で存在するもの（超越）がどのように意識に現れるのかを明らかにし、意識内在主義の可能性を追究したものである。全体は6章からなっている。

第一章では、知覚される以前の物についての存在信念がいかにして成立するのかを明らかにした。常識的には、例えば一軒の家がもともとそこに存在しており、後からやってきた意識が知覚という仕方ですその家を捉えるに過ぎないと思われるが、このような考え方は、意識される前の（意識の相関者ではない）物の存在を前提にしている。それに対してこの第一章では、あくまで相関主義・意識内在主義の枠内でこのような物の存在が捉え直された。フッサールの初期および中期時間論では、“以前に知覚されていた家”といった過去の物についての意識は説明されうるが、この章で問題になっている、“今はじめて知覚され、以前には知覚されていなかった家”といった物の過去についての信念が成立していることは説明されない。だが、中期時間論以降の1920年代の予期外れについての分析や地平の詳細規定についての分析を参照するならば、問題の過去についての信念を意識内在主義的に解明することができる。このような信念は、把持された過去の空間的地平・世界地平の内に、事後的かつ部分的な詳細規定（あるいは意味変化）という形で、新しいノエマの意味が入り込むことによって成立するのである。

第二章では、一見われわれの意識とは関係なしに生じているように思われる物の変化が、同一性との関係において、意識内在主義の立場から捉え直される。『イデー』第一巻では、「核は変化しうるものであるのに対して、『対象』すなわち諸述語の純然たる主語 [=或るもの] の方はまさしく同一に留まる」と述べられており、この可変的な「核」を表す表現として「例えば、『物』、『形姿』、……といった表現」が挙げられている。しかし、同一に留まるのは単に「或るもの」という形式的な意味だけではない。上のフッサールの記述に反して、「物」や「形姿」といった意味は、いったん意識に現れたならば、一貫して同一に留まるのである。このことをこの章は、様々な物の変化の具体例を分析することを通じて明らかにした。

第三章では、フッサールの理性の目的論を批判的に検討した。フッサールにおいては理性の現象学の中で、自体存在についての信念（定立）が集中的に論じられることが多く、理性の現象学は、フッサールの晩年には、理性の目的論という形で展開される。それゆえこの章では、この目的論を批判的に検討することによって、理性への意志が意識生において占める位置を確認した。晩年のフッサールは理性の目的論を意識の「普遍的かつ本質的な構造形式」だと述べている。そして、ここでの理性とは、理性への意志を意味している。だが実際には理性への意志を有していない三種類の意識様態があるので、理性の目的論は意識の普遍的本質とは言えないのである。

第四章では、意識の内在的領野のあり方について説明した。この章では、意識それ自身も反省以前に意識されているにもかかわらず、自己意識の無限遡行に陥らずに済むということを明らかにした。また、フッサール研究の古典的著作とされるクラウス・ヘルトの『生き生きした現在』とこの章での議論を比較検討することによって、われわれの解釈の独自性を際立

たせた。ヘルトによると、生き生きした作用の遂行極としての自我が究極的で先時間的な次元に位置するのだが、われわれの解釈では、このような自我極は究極的でも先時間的でもなく、むしろより根源的な「感覚する働き」もしくは「原意識」によって時間的なものとして構成されているのである。この「感覚する働き」こそが反省以前の自己意識であり、この「感覚する働き」によって意識体験が先反省的に意識されている次元において意識の遡行は限界に達するのである。

第五章では、“意識とは独立に存在する”という意味での自体存在について、あくまでも意識内在主義的に考察した。意識内在主義とは、物や世界を意識された限りのものとして捉える立場であるにもかかわらず、いかにしてその〈意識された限りの世界および物〉が〈意識から独立した存在〉という存在性格を持って信じられるのかということがこの章の問題である。まず、フッサールのテキストから引き出されうる三通りの答えがいずれも上記の問いに対する適切な回答になっていないことを確認し、その上でわれわれ自身の答えを提示する。すなわち、i) 人格的意識が外部を持つこと、ii) 世界および物と人格的意識との間の一方的な基づけ関係、iii) 意識の二重性、iv) 超越論的意識の自己忘却、という四つの契機によって「内在的超越」が矛盾なく成立するのである。

第六章では、かつての生き生きした体験が、把持や再想起といった過去意識の相関者にならないにもかかわらず、確かに生じていたのではなければならないということが示された。把持される以前のかつての生き生きした体験は、再想起されえず、もちろん把持されることもない。にもかかわらず、生き生きした原印象的な体験は、今この瞬間だけでなく過去にも生じていたのである。第五章までは原則として〈自体存在＝超越〉を意識内在主義の立場から解明したわけだが、この第六章では、過去意識の相関者に還元されえない超越的な過去が証示された。

以上の議論全体を通じて、「意識の内なる超越」がいかにして成立するのかということが詳細かつ具体的に明らかにされ、また、意識内在主義の一つの限界が示された。

論文審査の結果の要旨

笹岡健太の学位申請論文は、ドイツの現象学哲学の創設者、エドムント・フッサールの哲学のもっとも重要な問題を明らかにしようと試みたものである。フッサールの現象学は、彼の哲学の中期以降の発展の中で超越論哲学と自己理解されたものであるが、笹岡健太は、その際、超越論哲学における核心と言うべき「意識にとっての超越」の現れを主題的に問いだした。これは、フッサールの超越論的現象学のもっとも基盤的な次元をさらに批判的に問だし、明るみにもたらそうとするという意味で、際立った特徴をもつ論点である。この論点を笹岡健太は、存在信念の問題、物の変化と同一性の問題、フッサールのなかでの謎めいた問題である、理性の目的論の問題、理性の内在的な領野のあり方の問題、意識から独立に存在する自体存在のあり方をめぐる問題、嘗ての生き生きした体験が生じていたことのあり方の問題などの論究を通じて明らかにした。この博士学位申請論文は、地球環境学大学院の本質的な契機である人間と環境の相関構造を問う、人間環境共生基礎論分野において成立したものである。超越論哲学は、人間の意識の本質構造を解明するものであり、極めて重要な哲学の動向である。

この論文の全体の議論は極めて独創的であり、フッサールの現象学の基盤そのものの再検討という意図を持ち、フッサール現象学の研究者や、そもそもカントやドイツ観念論を含む超越論的哲学の研究者にとっても極めて有意義な意味を持つであろう。この論文の一部はすでに日本現象学会の大会で発表され、高く評価されており、例外的に全文掲載となったものである。

この博士学位申請論文の形式的な特徴は、フッサール現象学への批判的な論点を持っていること、この批判的な論点がフッサールの現象学が依って立つ、もっとも基礎の問題に照準を合わせていることなどである。それは、フッサールの超越論的な哲学が主題化する「超越」がはたして意識に徹底して内在しているのか、それとも意識から独立しているのかという問題を鋭く解明していることである。

人間は地球環境学の本質的な契機であり、本論文は人間存在の解明を行い、これにより地球環境学の発展に大きく貢献した。よって本論文は博士（地球環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成20年2月1日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行った結果、合格と認めた。